などゝいふ事が、終始一貫して居る、實に氏の生涯は、之れに因て積上けられたのである、大下君には常に僕にかういふ事を話された自分は繪を描く時に、決して苦んだり、悶えたりはしない、いつも愉快に樂んで描くと此一語は能く氏の性格を現はして居る、而して氏の作品は、直に此氣分を遺憾なく發揮されて居ると思はれる、同氏は又好んで山岳と湖沼を跋渉した、隨て作品にも、兩者が多い、而し氏の作には、斯ういふ大きな圖題よりも、却て庭園の一部とか、湖畔の一隅とか、又は草花の樣な平和な優しい圖題の方に成功して居る樣に思はれる、之れが即ち氏の天眞の流露ではあるまいか、要するに氏は平和を絶愛する人である、氏は亦僕に云ふた、洋畫趣味の普及を圖ると云ふ事は、畢竟自分の道樂に過ぎない、もし之れが爲に仆れたら本懷であると、此言は不幸にして事實となつてた氏は今夏松江市の講習から、引續き敦賀の講習に臨み歸京後健康を害し、溘焉として永眠されたのは、斯道の爲實に遺憾の極みである、吾々は斯道の爲に貢獻せられたる氏の功績と努力に對し、多大の尊敬を拂はねばならぬ。僕は京都から遲れ馳に十三日朝到着した、秋雨そぼ降る中に、亡友を弔ふべく、雜司ケ谷の墓地に出かけた、途中二三の研究所の人々か、花を持つて往くのを見、更に墓地に行つて見ると、七八人の研究所の人々が、雨中に悄然と佇立して居るのを見て、今更の如く亡友の傷ましき死を、切實に感じ暗涙に咽んだ。

畵伯はお達者

前田林外

梅雨の頃であつたと思ひます。或る暗い冷たい晩に大下さんは丸山晩霞さんと共に私をお尋ね下さいました。その晩(!)沼や湖や鈴蘭や林抔の話しも出ました。私が林には獨りで逆びにくひ、靑鷺や白鷺は沼の庭鳥だと申しますと、大下さんは畵家は妖怪を恐れてはゐられない、獨りで林に入らなければならぬ。なるほ

ど沼の水は靜である、庭とも見えるとて微笑まれました。又淺間山の鈴蘭の花、北海道の鈴蘭の花、この比較話も出ました。その後、私は大下さんにはあまりお目にかゝらなかつた。が、すゞ蘭の香による黃な蝶々の繪葉書や、其の外のを折り〳〵旅行先きから下さいました。で、お情の溫かい畫伯はいつもお達しやだと思つてをりました。と、先日突然正男さんから黑枠のお葉書でした。私は非常に驚きました。どうしても夢としか思ひませんでした。旅行！大下さんは只今も矢張り旅行を——お宅へ返り得らるゝ旅行をつゞけてゐらつしやると私には思はれます。深い林や靜な〳〵湖の畔で、淋しい景を獨りで靜に畫いてゐらつしやると思はれますが。

思出で多きアルバム

神東惇

△大下君は逝かれた、何の合圖もせずに突然逝かれた、自分には宛然夢の樣に思はれる、逝かれるならなぜ前に知らせて呉れなかつたらう「海洋」の表紙も賴むのだつた、瀨戸內海の大物も御願するだつた、何時でも出來ると思つて居たが……アゝ……モー大下君には此の世では何にも畫いてもらへぬ！君の柩を秋深き雜司ケ谷に送つた三日目の夕、虫の聲に圍まれた家の內にアルバムを繰り廣げつゝ新に逝きし友の俤を忍ぶ。

△最初目に着いたのは四十一年の五月上野精養軒で開いた太平洋畫會の晚餐會席上で自分が紀念に書いてもらつたもの、一枚の葉書の上に鷗外博士の「案心」と云ふ題字、吉田君のアラビヤ文字、滿谷君、石川君河合君等の自畫像の下に「汀鷗」と小さく書いたのが君で畫題を付くる可否を論じた後であつたと思ふ、君の署名は何時でも是れで自畫像は書いたことがない樣だ。